



暮らし豊かに

古布・ちりめんに魅せられて

私が二年ほど前、安曇野市北穂高にある高橋節郎記念館で開かれた「ちりめん細工・創作人形展」を訪れたときのこと。季節の行事にちなんだ色鮮やかな細工物や、薄暗い会場に灯されたろうそくの明かりに、ぼんやりと浮かぶ昔の婚札衣装を着けた狐の花嫁と花婿。その後ろには縁者の狐が並ぶ、「きつねの嫁入り行列」は、幻想的でまるでおとぎ話の中に入り込んだようでした。



▲人形作家 横川照子先生



▲創作人形 稚児

人のお父さまと、芸者さんの着物を縫うお母さまとの間に生まれ、物心着いた頃にはご両親が扱う残り布で、てるてる坊主などを作つて遊んでいたそうです。

住まい周辺には、家族で営むおひな様やブリキのおもちゃ、セルロイドの玩具を作る家が軒を連ね、時には絵付けされた羽子板が路地に並び、日に干されていた

そうです。このような環境のなかで育ったことが、現在の人形創作において大いに影響を受けているのではないかと想像しました。

ちりめんの布へのこだわりや人形創作の魅力は、他の布にはないしつとりとした柔らかさがあり、何と言っても触れていくだけでも癒されること。使用する古いちりめんの着物をいねいにほどこき、洗って干す。なかには、触っただけで粉々になってしまう布もあるそうです。弱った布は裏打ち(接着芯)を貼り、強度と張

りを感じ、初心者向けのかわいいうさぎと桔梗の花作りを体験させていただきます。

うさぎ、桔梗の花とともに、型紙から型を取り、ちりめんの布に写し、切っただけで縫い合わせるのですが、木綿の生地とは違い凹凸のある布は、空気を含んでいるような柔らかさがあります。

縫い絞った生地の波打つ様子にも角がなく、ぷつぷつりとして作品全体が優しい感じに仕上がりました。

コロナ禍の今、お家時間を心静かにちりめん細工で楽しむのもよいのではないのでしょうか。

先生がちりめん細工の指導を始めておおよそ20年、当初から通い続けている方もあり、現在23人の生徒さん

りを持たせます。型紙から型を取り一つ一つのパーツを縫い合わせ立体的になっていく様に感動を覚えると言います。

このようなお話をお聞きしながら、ちりめんの良さを感

を指導されています。昨年まで二年に一度作品展を開催していましたが、今年度は新型コロナウイルスの影響で開催できず、発表の場がなくなってしまうと。横川先生は大勢の方に作品に触れて、古布ちりめんの暖かみのある色や柔らかさ、そして人形や細工物の技術や技を感じていただき、若い方々にも古き物を大切に、そして楽しんでいただきたいと言います。

作品展の開催と人形制作にますます意欲を燃やしていらっしゃいました。

横川照子先生の作品は白馬村ギャラリー「まるしち Gallery & Shop」様に常設展示しています。お近くに行かれませんでした際には是非お立ち寄りください。

また、教室では随時ちりめん細工の体験も受け付けております。



▲完成したうさぎと桔梗

Information

創作人形 ちりめん細工
『野うさぎ』横川 照子

■電話 090-3565-7298

山共建設会報誌「ゆたか」

発行日：二〇二〇年十月十九日

発行所：山共建設株式会社

発行人：降幡真

印刷所：(株)成進社印刷

電話：〇二六三三二二二〇

ゆたか

vol.11

発行日：2020年10月



山共建設株式会社

創業大正10年

〒399-8102
安曇野市三郷温 3350
TEL. 0263-77-3161
https://www.yamakyo-k.com
✉ kentiku@yamakyo-k.com

お客様の声

出合いに感謝——木曾町日義「画廊となりや」 原純一郎様

「こんな物が出てきました」と解体中に鳥羽現場監督から渡されたのは「明治十六年末十一月大安日」と記された一枚の板でした。

中山道宮ノ越宿の旅籠だった家は同年8月の宮ノ越大火で燃え、11月には再建されたのです。表には二階絵図、裏には見取図が描かれていて、これ一枚の設計図だけで家を建てたのだという内川棟梁の話に当時の大工の技量の高さに驚かされたものでした。

佐久で暮らし退職した11年前、新聞広告で山共建設

の古民家再生住宅の見学会が安曇野市で開かれる事を知り、出かけて行きました。そこで初めて降幡課長と出会いました。

一通り説明を受けた後、古い宮ノ越の家を何とかしたいと思いを伝えました。その時は課長と降幡廣信会長の関係は全く知りませんでした。9月、課長さんが



◀紅葉を背に建つ「画廊となりや」

二人の方と一緒に宮ノ越にやって来ました。車から降りた年配の方は前の用水路辺りからじつと古い「隣屋(屋号)」を見ていました。20分ほど経ち、ようやく客間に入ってこられました。これが会長さんとの初めての印象的な出合いでした。

退職の前年に妻を亡くし一人暮らしの私は先祖の残してくれたこの家の材を使った平屋建てでの再生をお願いしました。設計担当の宮入さんは何度も平屋の図面を引いてきてくれました。ある時、同行された会長は手書きの蕎麦屋の暖簾をかけたスケッチ図を示し、「いいなあ。似合うなあ。出し梁造りの隣屋さんが無くなったら、宮ノ越宿は何の魅力も無くなってしまふ」とぼそり。これが二階家での再生を決心した一言になりました。

宮入さんとは週一の打合せの中で度々隣屋の思い出を語る事がありました。その時々、想いを汲み入れ、風通しのよいガラス戸を入れたり、坪庭へ降りる階段をつけたりと、梁の一部を切り四畳の書齋を作ってくれたり、予想もしなかった設計変更を提案してくれました。二階の欄間を生かそうとした鳥羽現場監督、広い四尺幅の桜材の階段を見えない所で安全に固定したり、大引天井の表座敷や当時のままの造りの和室の再現をして下さったりした内川棟梁。各々が豊かな発想

と工夫で隣屋の再生事業にあたって下さいました。

多くの子ども・保護者・同僚との出合いに恵まれた教員時代と同様にこの事業でも素晴らしい出合いと感動をいただきました。感謝です。

完成した翌年、「画廊となりや」の二階ギャラリー

では、長男・次女・私の自焼き白黒写真・絵画・木版画を展示した「親子三人展」を開催しました。さらに写真好きな私は笑顔・草競馬・バルーンフェスティバルの写真展を開催してきました。

今後は木版画と写真の常設展やイラストレーターの次女と小物作家の長女の二人展等が企画できたらと勝手に想い描いているこの頃です。



▲ご家族の作品展に思いを馳せる原純一郎さん



2年4月 手作りマスク

新型コロナウイルス感染者が増加し、マスク着用が日常になると、店頭からマスクの姿はなくなり、入手困難に。緊急性を感じ、現場監督さん用にマスク作りを始めましたが、材料の布、ゴム、ミシン糸までもが売り切れであちこちのお店を探し回り、やっと150枚ほど作りました。

早くマスク不要となる日が来ることを願います。

◀▶マスク製作中



2年6月

降幡廣信 信毎賞受賞

この度、信濃毎日新聞と信毎文化事業財団より古民家再生の概念を確立し、環境と人と建築の調和に寄与したとして、その業績を評価され今回の受賞となりました。

90歳を過ぎた今も、「これからも、自分にしかできない仕事がある限り、続けていく」との力強い言葉に、私たちも励まされます。

◀信毎賞授賞式
(写真：信濃毎日新聞社提供)



2年7月

銅板で折鶴



▲折り鶴を手に微笑む上條さん



▲曲線が美しい折鶴

2年7月

ユニフォームを一新

長年、変わらぬスタイルを通してきましたが、この度、動きやすく時代に合ったスタイリッシュなユニフォームへと一新しました。着慣れないユニフォームに戸惑いもあったようですが、関係者の皆様方にはスタイルよく見えると好評のようです。(笑)



▶新しいユニフォームを着用した金子さん

2年6月

宅建業務の取扱いを 始めました

本年6月より不動産の仲介を行っております。土地・建物を「売りたい」「買いたい」など不動産に関するご相談がありましたら、お気軽にご相談ください。



飯沼正明飛行士と生家 《第2回》

その後兄嫁のかうが亡くなり、翌年の中学5年に父親も亡くなってしまい、兄と正明、そして小学校に入学する前の幼い甥と姪の4人家族となります。正明は銀行員だった兄に代わって、家事やわずかに残った田畑の農作業をする日々を送ります。

飛行家を志した正明は、昭和6年2月に航空局の試験に合格し、民間のパイロットとしてスタートを切るようになります。兄友員は正明が合格した日の喜びをこのように日記に書き残しています。

「銀行にて夕食に招かれ、後茶の時に家より正明来り、航空局操縦士の試験合格の通知来るを告ぐ。夢かとばかり



▲パリ到着の飯沼正明

家を守らねばと、競売にかけられた生家を必死で競り落とします。そして出征する直前に兄と会い、生家の売渡証を書き残して約2週間後の12月11日、29歳で亡くなりました。大飛行時代と言われた83年前の純国産機「神風号」による「垂欧連絡記録大飛行」の世界記録樹立。

り驚き、且つ喜び、全く手の舞い足の踏む所を知らざりき、は一重に幸運と神の加護の御蔭にしてさぞや地下に眠れる父が嬉しからんと仏壇に灯明をつけ香をたきて、通知状を霊前に供ふ。若しこんな時に父在らば如何ばかり喜び給はんと涙自ら下る。寝床に入れども嬉しさに興奮して中々に眠りに落ちず。粉雪はさらさらと小さき音を立てて降る。」

民間のパイロットになった正明はその給料、飛行手当のほとんどを生家に送金していました。兄弟力を合わせ一生懸命に借金返済をしますが、それでも抵当に入っていた生家は競売にかけられてしまいます。正明は何としても

その時、日本にもリンドパークのように世界から名パイロットと称賛された、飯沼正明飛行士がいました。日本の航空史に金字塔を打ち立てたそのパイロットは若くして亡くなりますが、当時のことを良く知る多くの人々に賛同され、生家に記念館が建てられました。正明がいかに生家と家族のことを思っていたかを、最近発見された正明、兄友員の手紙や日記等で知ることが出来ました。家族のため命がけで飛行機を操縦し家を守った飯沼飛行士、その思いを忘れずに明治9年（1876年）に建てられた飯沼飛行士生家を記念館とともに未来に残したいと思えます。

文・飯沼成昭（飯沼正明、大甥）

特集記事に寄せて

丸館・飯沼家は、明治時代からは三光館と呼んで、蚕の種屋を広く営んでいたと云う。その姿が今も母屋と土蔵等、家屋敷から伺える。安曇野の国道147号線沿いの目につく家々の数多い中、特に落ち着きを持った、ここ飯沼家の家屋敷からは長い歴史と共にある不思議なドラマがひそんでいそうな気が感じ取れる。さもあらん、堅実な蚕の種屋だったり、ロンドンー東京間の世界最速記録を樹立し、一世を風靡した、神風号の飯沼正明飛行士の生家として、世界中にその名が知れ渡った場所だったろうから。

降幡 廣信



▲イギリス・クロイドン飛行場



▲ 飯沼正明生家と記念館



▲飯沼飛行士記念館 館長 飯沼成昭さん